

■昭和60年代から平成期

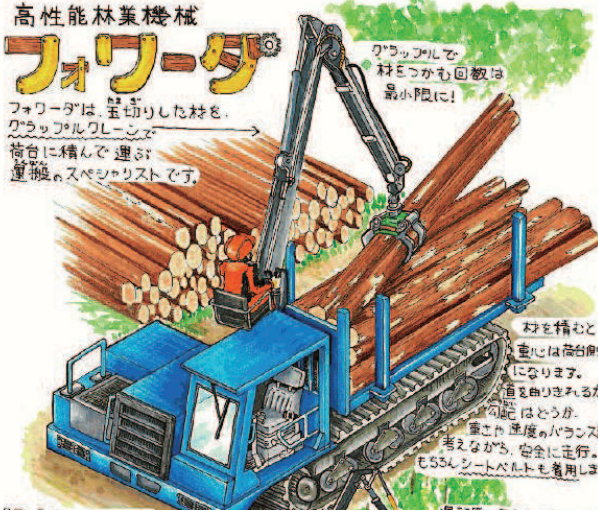
▼森林と生活について

年号が昭和から平成に変わるころ、生活様式の大規模な変化もあり、森林と人々の関わりが薄くなってきました。一方で自然環境への高まりや水源の涵養、土砂防備機能、地球温暖化対策など森林の公益的機能について注目され始めた時代でもありました。

▼町内の林業・木材産業の状況

外国産材の輸入拡大とバブル経済の崩壊による住宅需要の減少、農業の機械化による木材使用の減少もあり、これまで続いてきた木材価格の崩壊が始まりました。木材価格が低迷し林業も生産性が求められ、林地の集約化や高性能林業機械による作業の効率化が進められました。

この頃、町内の林業事業者も高齢化や後継者不足と相まって極端に減少しました。また、町内各地にあった製材所も市場の縮小から業種の変換などにより減少しました。

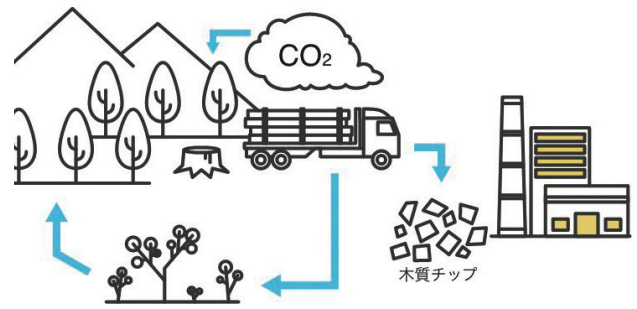


▼町内の林業について

平成の後半に入ってきたころから、これまでの植林、下刈り、徐間伐といった「育てる林業」から、利用間伐、主伐が主体の「使う林業」への転換が求められました。しかしながら、市場の縮小による木材価格の低迷により、主伐は進まず町内の林業・木材産業は縮小していく一方でした。

また、作業の効率化により、バックホーをベースにした林業機械やフォワードャという重機が主流の作業体系となったことで、小規模事業者は減少していききました。

■平成から令和へ



平成25・26年の豪雨災害時に多くの山腹崩壊や土砂崩壊があり、森林の保水機能、土砂防備機能の重要性と森林整備の重要性が再認識されました。林業については、昭和・平成を経て一時的な高騰はあるものの安定しており、市場の要求を適切に把握した販売と木質バイオマスの活用など新たな林業の形ができてつつあります。

町内にも、これまで事業を行っていた「西置賜ふるさと森林組合」の他、新たな林業事業者の誕生や木材加工施設の整備など林業の活性化が図られています。

森林・林業の今後に期待すること

自分たちの生活において森林・林業の果たす役割は非常に大きいものと認識している。

森林の公益的な機能の維持に向け、しっかり守っていききたい。それらを守るためにも林道などのインフラ整備の充実については、町をはじめとした関係機関と連携してお願いしたいし、林業事業者は、それを活用した森林整備、林業の振興をお願いしたい。

そして、次世代を担う子供たちの育成に向け緑の少年団活動なども継続的にお願いしたい。

(小林宣浩氏)

町民の皆さんが山に関心を持ってもらう事が大事。そして山が手入れされることで太陽の光が入り、下草が生え災害に強い山になる。昔のように森林が循環していくようになってほしい。

今後においては、エネルギーの供給の面からも林業は重要な役割を果たすものとなっていくと思う。そのあたりも含めて、森林の保全が必要になってくる。

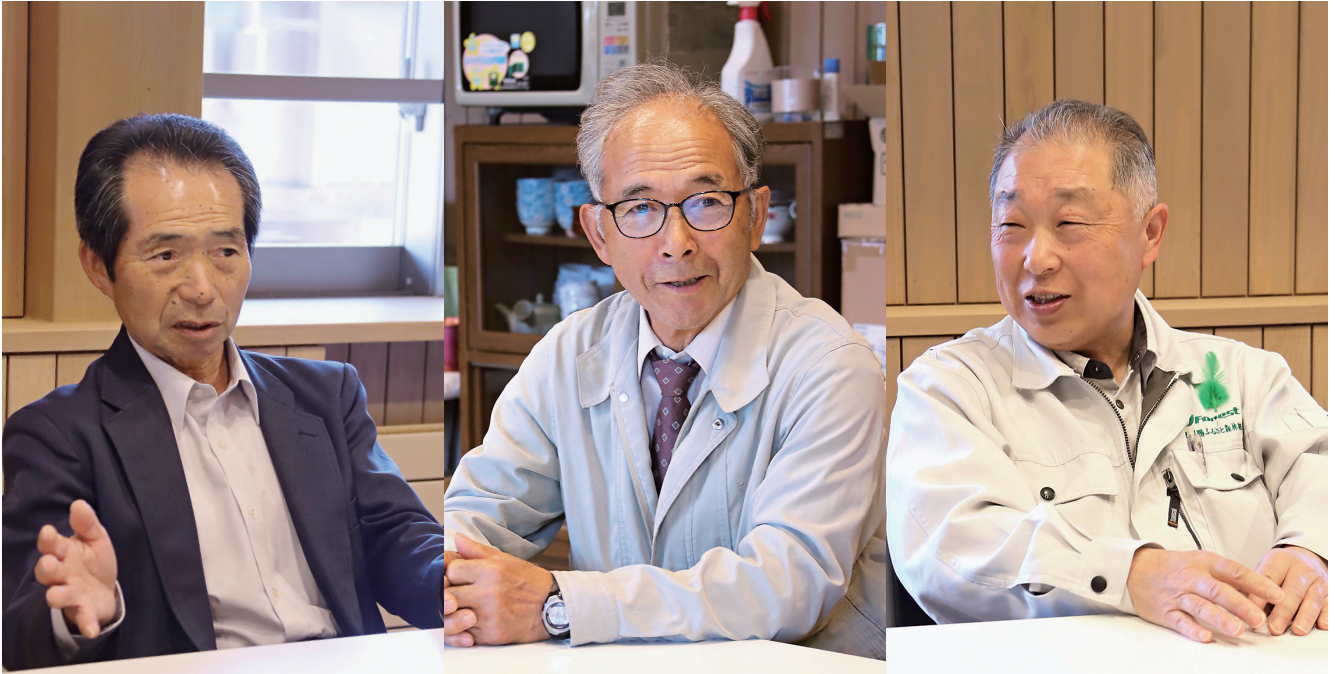
(小林松雄氏)

林業事業者としては、木材価格の安定を願っている。また、白鷹町は戦後の拡大造林時、不適地にまで杉が植林された経過がある。今後、適地適木による植林を行い多様な森林づくりを行っていく必要がある。合わせて、林業人材の確保、育成も課題であり、関係者一体となって人材の育成も行っていきたい。

また、子供たちが木に触れあう機会を作るという点でも森林公園は大切である。町でも積極的に森林公園の保全と活用機会を作ってほしい。

(海老名和好氏)

「森林のスペシャリスト」に聞く **もり** 森林と共に 森林・林業の今後



小林宣浩氏

小林松雄氏

海老名和好氏

元白鷹町職員 昭和47年から昭和59年まで当時の農林課林務係に在籍。昭和40年代から50年代にかけて、林業構造の変化に対応するべく、現在の白鷹町林業の基盤となる林道、作業路の整備を多く手掛ける。

昭和45年より家業の松木材において、林業、製材業を営む。伐採、製材等の技術を有する技術者。特に集材技術においては、架線集材技術等の卓越した技術を有する。

昭和56年に当時の白鷹町森林組合に入組、平成11年より森林組合の広域合併により西置賜ふるさと森林組合職員として従事、現在は職員の他、「西置賜ふるさと森林組合」筆頭理事も兼ねる。

白鷹町の森林・林業について

■昭和40～50年代の「森林と生活について」

雑木は生活用の薪や炭の材料、キノコの原木として重宝され、下草は堆肥用の材料として重要な産物でした。森林は日常の生活に欠かせないものであり、常に手入れが行き届いた状況でした。

▼町内の林業・木材産業の状況

町内には、造林、育林、伐採などの林業事業者が20数者おり、町民の多くの方が林業に関わる仕事をしていました。また、林業が盛んであると同時に約20社の製材所があり、多くの製材品が鉄道により首都圏へ出荷されていました。

この年代は、住宅需要の拡大もあり、製材用の丸太価格は、当時の価格で2万5千円/1立方メートル程度(現在1万6千円/1立方メートル程度)で取引されていました。その他、杉の根っこなどの端材はリンゴ箱や魚箱、細木は杭やハセ木、雪囲いの材料など、木材は余すことなく利用されていました。

町内産材の多くは森林組合の土場で町内外の製材業者や地元工務店により取引されて

おり、木材の地産地消も盛んに行われていました。

▼町内の林業について

当時は木材価格も高く杉の植林も盛んでした。造林や育林も地域の人足や学校の親子行事でも行われ、地域住民が林業に関わっていた時代でした。

当時の伐採、林内搬出の作業体系は、チェーンソーによる伐倒、馬や牛による土ソリ搬出が主であり、林道幅も狭いことから搬出は2～4トンのトラックに限られていました。

トラック輸送に対応する林道の整備や作業路の開設が盛んに行われたのもこの頃であり、現在も使用されている林道のほとんどが整備されました。その後、昭和50年代半ばからは、林内作業車(トラクタ1型集材)も普及、平成に入り林内作業車もキャリア式の作業車となり、作業効率が格段に上がっていききました。

